



Russell Academy

ラッセルが教える“資産運用のつぼ”

投信ってどうやって選ぶの？

個人投資家の方が投資信託を選ぶ際には、過去の運用成績が良いものを選択しがちです。また、投資信託評価機関が行う格付けも、一般的には過去の運用成績を基に決定されることが多いようです。

しかしながら、過去の運用成績が良いからといって、将来の運用成績も良いとは限りません。将来良い運用成績をあげることができる可能性のある投資信託を選ぶには、実際に投資信託を運用している運用担当者にとって判断することが不可欠です。

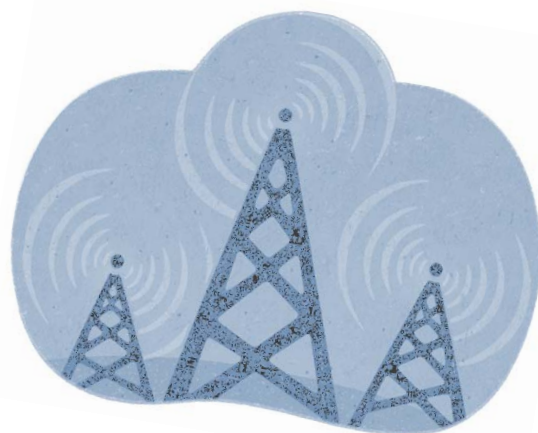
とは言え、実際には個人投資家の方が運用担当者にとって判断することは難しいでしょう。そこで、一つの解決策として、投資信託の運用会社の調査と選択をプロに任せることも考えられます。

「少し日本株式の投資信託を買ってみようかな」あなたなら、まずはどうしますか？

新聞の投資信託欄を広げてみると、日本株の投資信託と思しきものが無数にあって、どれに投資すればいいのか、これだけでは皆目検討が付きません。投資の専門雑誌を見ると、色々な投資信託が詳しい説明を織り交ぜて紹介されていますが、どれも素晴らしい商品に見えて目移りしてしまい、やっぱり絞り込めません。そこで、投資信託評価機関が発表する格付けが大きな判断材料になることがあります。各商品を星の数等でランク分けしたものが公表されており、インターネット等で簡単に見つけることができます。その中でも、やはりランクの高い商品を選びたくなりますよね。でも、このランクって通常どうやってつけているのでしょうか？

過去の運用結果は判断材料に使える？

一般に、投資信託をランク付けする時によく使われるのが、過去の運用成績です。つまり、これまでの運用成績が良かった商品のランクは高く、逆にあまり運用の振るわなかった投資信託のランクは低くなることが多いです。確かに、過去の運用成績が良かった商品は、将来も優れた成績を残してくれそうな気がします。こうした評価方法を一般的に「定量評価」と言いますが、この方法は本当に将来の成績を予測できるのでしょうか。



1

ラッセル・インベストメント証券投信投資顧問株式会社

金融商品取引業者 関東財務局長(金商)第196号

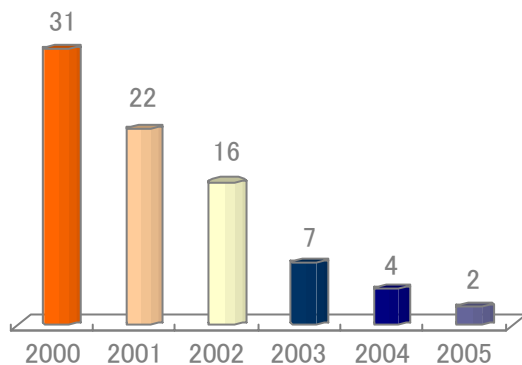
加入協会: 日本証券業協会、(社)投資信託協会、(社)日本証券投資顧問業協会

TEL: 03-5411-1515

(受付時間: 営業日の午前9時~午後5時(半営業日は午前9時~午前11時)まで)

URL <http://www.russell.com/jpin>

 Russell



←この図は、123社中、2000年に運用成績上位25%に入った31社の運用商品が、翌年から各年毎にいくつ上位であり続けたかを表わしています。上位25%であり続けたのは5年間で2社のみでした。このように、過去の運用実績は必ずしも将来の成果を保証するものではありません。

123の米国株式の運用商品について、6年間のパフォーマンス・データからラッセルが加工・作成。(2005年12月)
(出所:ラッセル・インベストメント・グループ)

この表は、ある期間において優れた運用成績を残した運用商品が、その後も良好な運用結果だったのか、その推移を追跡調査したものです。ご覧頂いてお分かりの通り、過去の運用成績が良いからといって、将来の運用成績も優れているとは必ずしも言えません。つまり、「定量評価」だけで運用商品を見極めるにはどうも限界がありそうです。

それでは、どうすればよい運用商品が見つけれられるのでしょうか？

実はこれは大変難しい質問です。将来必ずいい成績を残す運用会社を特定することは不可能だからです。しかし、いい成績を残す可能性が高い運用商品を見つけることは可能だとラッセルは考えています。そのための方法が「定性評価」です。

定性評価とは、実際に運用を行っている担当者と直接面談をし、様々な質疑応答を繰り返すことによって、その運用担当者（運用会社）は、将来本当に優れた運用成績を残すことが可能なのか、運用担当者は本当に優れた素質を持った人なのか、これらのスタッフを支える組織は本当にしっかりしているのか、といった様々な面を確認し、それらを総合的に判断した評価を言います。

また、こうした評価は一回で終わるものではありません。運用担当者が社内での人事異動や退職で交代を余儀なくされることもあれば、同じ担当者であっても他の仕事に追われ、運用に時間が割けないような場合もあります。また、最近はこの業界同様に運用会社同士の合併や買収も少なくななく、こうした事項は商品の運用体制に少なからず影響を及ぼします。つまり、一度よいと判断した運用商品であっても、その内容に変化はないのか、繰り返し評価し直す必要があるのです。



でも、そんなことが本当にできるの？

そこが一番の問題です。例えば、ある企業の株式の購入を検討することとします。その銘柄の情報について調べようと思うと、財務状況や株価の値動きは市販の書籍やインターネットで入手することができ、PERやPBRといった株式指標を計算することは可能です。また、企業によっては社長のインタビューが記事になり、その企業がどういうビジネス戦略を持っているのか把握することもできます。しかし、運用会社の運用手法に関する情報を探そうと思っても、なかなか思うようには見つかりません。つまり、運用商品の中身を一般的な公開情報で判断しようと思っても、極めて困難なのです。

それではということで、投資信託を購入し、その商品の運用担当者に面談を申し込んでも、普通は会ってくれないでしょう。もし仮に会ってくれたとしても、一体何を質問すればいいのでしょうか。さらに、もし質問することができ、それに回答していただいたとしても、その内容をどのように分析すればいいのでしょうか。もうお分かりのことと思いますが、定性評価は通常その機会を得ることは言うに及ばず、さらにはその調査の分析をすることが極めて困難なのです。



そこで、一つの解決策として、運用会社の調査と選択をプロに任せてしまう、そうしたコンセプトの投資信託が増えています。投資信託の成績の良し悪しに一喜一憂せずに、あなたも一つ一つの投資信託を選ぶ手間はプロに任せて、ご自分の時間を有効に使いませんか？

発行日：2006年12月18日



◎ご留意いただきたい事項

•本資料はラッセル・インベストメント証券投信投資顧問株式会社が投資に関する一般的情報の提供を目的として作成したものであり、特定の運用商品の推奨等の投資勧誘を目的としたものではありません。また金融商品取引法に基づく開示書類ではありません。

•投資信託は、株式および公社債等値動きのある証券に投資しますので、組入株式や組入公社債等の価格の下落ならびにそれらの発行会社の倒産または財務状況の悪化等の影響により、基準価額が下落し、損失を被ることがあります。また、これらに加え外貨建資産を保有する場合、外国為替相場が当該資産の通貨に対して円高になった場合には、基準価額が下落し損失を被ることがあります。したがって、元金が保証されているものではありません。投資した資産の価値の減少を含むリスクは投資信託をご購入のお客様が負います。

•リスクは上記に限定されるものではありません。投資信託の取得のお申し込みにあたっては、必ず当該商品の投資信託説明書(目論見書)を販売会社でお受け取りになり、「投資リスクおよび留意点」等、内容をご確認の上、ご自身でご判断下さい。

•投資信託には、「お申し込み時」、「ご換金時」、「保有期間中」にご負担いただく手数料等の諸費用が発生します。投資信託の取得のお申し込みにあたっては、必ず当該商品の投資信託説明書(目論見書)を販売会社でお受け取りになり、「手数料および税金」等、内容をご確認の上、ご自身でご判断下さい。

•投資信託は、預金、保険契約とは異なり、預金保険機構、保険契約者保護機構の保護の対象ではありません。

•金融商品取引業者以外でご購入いただいた投資信託は、投資者保護基金の対象ではありません。

•当資料は、当社が信頼できると判断した情報に基づき作成しておりますが、その情報の正確性や完全性についてこれを保証するものではありません。

•当資料の内容は作成時点のものであり、将来予告なく変更されることがあります。

Copyright © 2007. Frank Russell Company. All rights reserved.

当資料中「ラッセル・インベストメント・グループ」及び「ラッセル」は、フランク・ラッセル・カンパニー及びその子会社等の総称です。

ラッセルによる事前の書面による許可がない限り、資料の全部又は一部の複製、転用、配布はいかなる形式においてもご遠慮下さい。